

## 第四十二回 乗ること

### 堀内 守

#### 共感用語

「話に乗せられて」とか「乗りに乗って」などという言葉があります。

「いやあ、あのプランにはすっかり乗せられちゃって……」などという場面にはよくお目にかかります。こういう表現からも推定できるように、「乗る」には一種の共感、共鳴、共動というような面があるようです。

「調子に乗る」「波に乗る」なども同じです。「調子に乗って」おしゃべりしていて、時のたつのを忘れたというような経験はだれでももっている、と思いますが、念のため国語辞典を引いてみて、この種の「乗る」の用法が意外と多いのに驚かされました。「乗りかかった船」「口車に乗る」「計略に乗る」「勝に乗る」「調子に乗る」……。いや、その多いこと。「図に乗る」というようないい方にハッとさせられながらページを追っていくと、「リズムに乗る」などまであらわれてきて、あたりを歩き出すような錯覚を起こします。「インクの乗りがよく

ない」という例文も、「おしろいの乗りがよくない」という例文も、その辞典の成立年代を推定させるに十分でした。

だが、待て。「悪乗り」などというのもありますから注意が必要です。「乗る」にはしかるべき理由があって、何でも調子づくというわけにはまいりません。

そう思って、辞典に載せられている言葉の群れを眺めていると、「乗る」には、クルマや馬に「乗る」というような具体的な「乗る」と並び、もっと抽象的な「乗る」があって、そのうちの「口車」などは「車」があるとはいえ、明らかにクルマではありません。つまり、この種の「乗る」の方は、「乗せる」側に相当手の混んだやり口だの、やり手だのが存在していることを思わせませう。他方、「乗せられる」方を考えてみると、人間という存在の「お調子者」性や「おっちょこちょい」性が見え見えになってくるのです。

特定の人間だけがそうなのではない。どんな人も、ほめられれば得意になり、おだてられ、おだてに乗るとい

う面をもっている、といったら過言でしょうか。

### 「ちびっこ」という言葉

だれがはやらせたのか知りませんが、この「ちびっこ」ということはあまり語感がよくありません。からかっているのやら、ほめているのやら、おだてているのやら、わけのわからぬところがあります。子どもたちの自称でないことはたしかです。

まこと、哀しい、無責任なことばで、「ちびっこ」の風景は「ちびっこのど自慢」だの、「ちびっこ向け怪獣ショー」というようなものから「ちびっこ〇〇コンテスト」というような薄っぺらいものが多いのです。

そこに見える「薄っぺら」の根拠は、その前提に「子どもなんて、このくらいで乗ってくるさ」という発想が透けて見えるからです。一回きりの、無責任な催し物をやって人集めをする。その手段として「ちびっこ」を使っているのですね。そういうコンタンに対しては批判的に対応しておくことにしようではありませんか。

見本を若干おめにかけておきます。

▲某月某日、「ちびっこ潮干狩大会」が某所の広告に出ていました。はて、と思つて読み進みますと、以下のごとき条件が付されています。毎日、先着、百名様入場無料。ただし三日間だけ。

「入場」とあるからには浜に囲いでもするのか殺風景な、と思つて、その先を読んでまた驚かされました。何と、この「潮干狩」は、某スーパーマーケット内で行われるのでした。いくら何でも、これでは「潮干狩」が泣きます。「毎日」とうたつてあるにもかかわらず、「三日」がすぐあとに出てきますから、錯覚を起こします。三日間しかやらないのです。

念には念を入れ、ある一日、某スーパーに出かけてみました。「ちびっこ」たちとママさんたちはたしかに集まってきました。列をつくつて待っています。係の人が順番に番号札をくばります。「九十七、九十八、九十九、百！はい、ここまでエ……」というあたりで「ワー」という歓声があがりました。あとはジャット・ア

ウト。「どうか明日お越し下さい」。

砂場を利用したまやかしの潮干狩は、始まって三十分ももぢませんでした。

結局、「ちびっこ」は、ママたちをここに集めるための記号に過ぎないことがわかりました。臨時につくられた砂場には小さなオモチャが隠されていて、それを「ちびっこ」とママたちが汗を流して見つけ出すというオソマツ。

見ている側が砂に小恥かしくなるシロモノでした。

▲これとくらべたら、某商店街が二か月に一回催す「ちびっこど自慢」の方が小っ恥かしさがないだけ、安心して見ていられます。カラオケで「のど自慢大会」をやったら、判定をめぐつて大立まわりが起きてしまい、それ以後は「ちびっこ」に出してもらい、おとなはもっぱら応援にまわる由。時刻は六時から九時まで。延三時間。一人平均三分で終わるから短かい歌ばかりだな、と思つたら、ある専門家が教えてくれました。「演歌は大部分三分以内で終わるよ」と。いわれてみればそのと

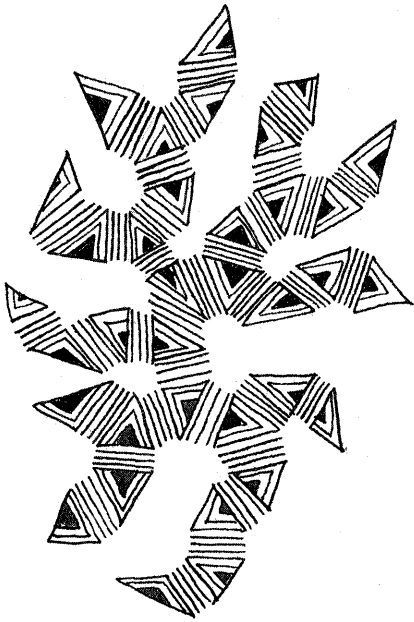
おり。

「ちびっこ」といってもすさまじく、三歳の子が「あなた、別れ、いとし、雨にぬれ、涙……」などのことが並んだ演歌を切々とうたいあげたときは、まわりの応援者たちもシーンとしていました。正調の民謡かうたわれ、落語や漫才や物まねなども登場し、みごとなものだと感心させられます。が、何といっても見どころは、「次は○○ちゃん。張り切ってどーぞ」と司会を演じる「ちびっこ」です。だれに向かっても「張り切ってど

ーぞ」を連発するものですから、どこまでいってもワンパターンです。しかし、その司会の手ぶりはおとな顔負けでした。

一時的な驚きづくり

「ちびっこ」ときたら、だいたい以上のような文脈が出現する可能性が大了。小細工、おあそび。跡を見れば、その空しさは一目瞭然です。ピントが合わせにくい被写体たる子どもを、あらかじめ合わせ易いものに加工



しておき、その枠内でしか企画を立てていないからです。

「ちびっこ」「ヤング」「OL」「ミセス」……「シルバ  
ー」。何やら上ついた記号が飛び交っているのがわかり  
ます。しかし、これを性急に非難することはやめておき  
ましょう。性急に非難することよりも、少々ねばり強く  
その群とつき合ってみるのです。

まず指摘できることは、「ちびっこ」が何かの「呼び  
水」として使われていることです。購売直結のための顧  
客動員手段、客の固定化、組織化へ向かう志向が「ちび  
っこ」というやんちゃな表現をつくり出したのでしょ  
う。子どもも、この「呼び水」に対し、一時的に興奮  
し、乗ったことは否めません。

次に指摘できるのは、「ちびっこ」の音おんの面です。こ  
れは明らかにもじりです。アダナに近いのです。その音  
は、いろいろな連想を可能にします。ふくらんでいきま  
す。ひとそれぞれが「ちびっこ」に、あるイメージを加  
えていき、服装、行動様式までそのイメージにふさわし

くつくりあげていきました。

「ちびっこ」は、現実の子どもたちをもとにつくりあ  
げられたイメージではなく、そういう見方の枠だったの  
です。焦点の合わせ方でした。だから、「ちびっこ」と  
いう見方を通して見ると、どの子ども共通にちびっこらし  
く見えたのでしよう。

第三に指摘できることは、「ちびっこ」には時間が繰  
り込まれていないということです。子どもや、童などが  
進行形の「大きくなれ」という志向でとらえられている  
(その証拠に「大きくなっただね」がほめことばに使われ  
る)が、「ちびっこ」はそれを欠いている。「ちびっこ」  
はちびっこのままなのだ。永遠のピーター・パン!  
以上、少し誇張して「ちびっこ」の特徴を挙げてみた  
のですが、この先、追い追いの「ちびっこ」を「奥の  
手」を使って修正してみようと思えます。

間\*

生まれ身の子どもたちを相手にしていると、間\*がいかに

大切かを思い知らされます。つまり、タイミングのことです。

これを考慮にいれずに、いきなり子どもに向かっていくと、予想に反して子どもは相当したたかなので、わずかのあいだに疲れてしまう人が少なくありません。いきなり、素手で飛び込んだようなもので、どうしていいのかわからなくなってしまふ。

事前の準備が大切です。

既成の概念と固定観念を破るには、あの「ちびっこ」の分析のように、ごく小さな話題を取りあげて、いろいろな角度から論じてみる必要があります。肩ひじをはずし、リラックスして。

いきなり「子どもとは何か」などを大上段にふりかぶらない方がよろしい。

少々理屈っぽく響くかもしれませんが、下手をする  
と、いや、ややもすると、「……とは何か」という問い  
の立て方は、変な方向に向かって走り出しかねないから  
です。むずかしい哲学談義は止めて、この問いの隠れた

仕組みを「奥の手」で正体を明かしてみると、左のよう  
になります。

▲「……とは何か」は、多くの場合、答が一つあると  
予想されている。せっかちな人は、この答が「……とは  
Xである」というように簡単明瞭な答が出てくるのを期  
待している。

▲もう少し悠長な人は「……とはXであり、Yであり  
……」というように、いくつかの答を列挙する。(あれ  
でもある、これでもある。あれでもない、これでもな  
い。)

▲もう少し慎重な人は、この問いだけを見ずに、その  
問いを問うている自分に向かい、「なぜ、このような問  
いが出てきたのか」と考える。すると、状況だの、実存  
だのが問題になってくる。

▲簡単に答が出ないと予想している人は、自分だけで  
考えずに、だれかに向かって、「いっしょに考えてみま  
せんか」と呼びかける。

このことよって、考えるということはゲームのよう

に、劇のように変わっていく。うまくいくと、考えることが面白くなる。

モノからコトへ

おわかりでしょうか。

同じ「子どもとは何か」という問いでも、右から左へ移るにつれて、その問い方が変わっていききました。のみならず、にぎやかさも増していき、考えることができごとくに近くなっていきました。

これを「モノからコトへ」と表現しておきましょう。

私たちは「子どもとは何か」という問いを立てるとき、いちばん素朴なレベルでは「何という大げさな問いだろう。子どもなんて、ここにいないじゃないか」という声はどこかからきこえるように感じるはずです。そのかぎりでは、「いま、ここにいる」子どもが答です。

でも、その素朴な感想は、ふたたび動きはじめます。

「こんな素朴な答じゃいけないのかな。そういえば、あの問いはヨソユキで、並の答では満足しないようなイカ

メシイ顔つきをしている」などというギモンをきっかけにして。

ここでひとつ、単純な表現をしてみましょう。二つ並べて、黒板にでも、紙の上にでも、砂の上にでも書いてみてください。

子どもというモノ。

子どもというコト。

違っているのは「モノ」と「コト」の部分だけです。これがやがて相当のヒラキを示すはず。さて、「子どもというモノ」の「モノ」は、「物」や「者」を超えた「存在」です。もっとくだけていえば、「子どもでもアルとはどういうコトか」。「子どもでもアルとはどういうアリサマなのか」。「子どもでもアルとはどういうことデアルのか」というように「アリサマ（有様）」をたずねていることであるのに対し、「子どもというコト」を問う方は、「子どもというコトは何をスルコトか」と、「スルコト」を問うているのです。

「子どもというモノ」は、余分なところを除いていっ

て、純粋な答えを求めるのに対して、「子どもというコト」の方は、にぎやかな、多様な面をとらえようとしません。

沈思熟考と討論の違いといってもかまいません。

「子どもというコト」の「コト」は「デキゴト」の「コト」と同じです。ですから、意外性があり、娯楽性もあります。このコトを重視したいと思います。

#### コトの中心

子どもというコトという観点は、子どもがどのようなツール（道具）を介してできごとをつくり出していくかという観点が入っています。もちろん、ここにいう「道具」は、あらかじめ道具としてできていないものでもかまわない。棒切れだって、ちゃんと大道具、小道具、持道具に仕立てあげてしまうのですから。

この「道具」がいかにできごとをつくり出すことでしょうか。その場合、子どもにとっても、それを見ているおとなにとっても、コトは四つに分類可能です。

一、意外さ。おや。あら。ほう。

二、造反さ。常識への挑戦。

三、感動性。ワァ、驚いたなあ。

四、独創性。そんじょそこらにないな。

これらの四つがたえずつくり出されているのがデキゴトです。「出・来・事」とはまことにうまい表現ですね。「事」がつきつきと「出て来る」のですから。哲学ではこれを「現前」などと呼んでいます。そのむずかしい定義よりも、「出・来・事」とか「出来事」のように「間」をとってみるの方がピタリでしょう。

また「子どもということ」という観点は、子どもがたえず交渉し、交流し、交換し合っているコトに注目します。他の物と、他の人と。このとき、交換されているのがかりに何かの物であっても、その物は単に裸の物としてあらわれているのではなく、何らかの意味を帯びていることを見のがすべきではありません。

いささか気取った言い方をお許しただいて、そのコトを表現し直しますと、その物は交換されるなかで、メ



ッセージを発信しはじめるのです。

ひとつの石ころが渡されたとします。もちろん、「これあげる」などという表向きのメッセージも交わされることでしょうか、深い層では「仲よくしよう」というメッセージとなっていたり、「君だけにあげるのだよ」という格別のメッセージだったりするのです。

コトの中心にはこういう仕組みがあって、私たちに驚きや新鮮さを贈り届けてくれます。

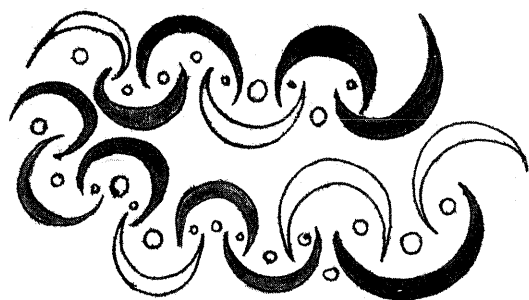
### ことばの発掘

何かに夢中になっていることを、没我の境地にいるとか、ほかのことが目に入らないというように表現する。没我も無我も宗教的意味に通じているが、子どもというコトを見ていくと、子どもは無念無想とは反対で、無心である。修行を経ずとも無心でいられる。

ひとりごとが口をついて出る。つぶやきがひとりごとに出てくる。それを取材して整理してみると、思いがけない仕組みがあらわれてきた。いったい、こんなことがあ

っていいものか、というような高度なひとりごともある。ば、笑いを誘うひとりごともある。

砂に刻もう。どこからがボクの国かな。ブルドーザーでマンションをこわします。おうちが広くなりました。ええ、いつでもどうぞ。アヒルの洗たく屋です。チリ紙交換車がやって参りました。みどりを通ってくる風。デザインがいいよ。



これはいったい何なのか、考えてみてください。

詩ではないし、CMでもない。台詞のようにも見えてくるではありませんか。もう少し続けましょう。

白い風。君の耳は柏もち。横着者めが。うつろなノンタン。ウソっぽっち。ボロンポロリン。この先まっくら。盛りあがりました。幸せいっぱい腹いっぱい。お安くしますが。あなたのせいよ。やりすぎハッター。なさないはなし。中年ライダー。

こうなりや、やるだけよ。しょがねえな、こいつ、おとなしくしろ。釣れたか、釣れぬかはもう古い、いまはリールと語り合う。着地準備オーケー。応答ねがいます、応答ねがいます。やったな、こいつ。キライ！もうイヤになった！限界だ。

おだやかでない表現も結構多い。しかし、いかがでしょう。これらはことごとく交換のパイプがどのようなものであるかを示していますし、交換の場の構造を暗示しているようです。

「やったな、こいつ」は、ことばどおりであることも

あれば、親しきの表現である場合もあります。仲良く遊ぶながら、ことばの上では悪態をついているようなグルーブも少なくありません。乗りに乗って調子づいているときにはもっとものすごい表現が交わされていることもあります。

わたしの心のアンケート。チャンピオンのさすらい。みんなで歩いていくんだ、家が見えなくなるまで。

乗りに乗ったこういうつぶやきの中から傑作を三つお目にかけますよ。

「季節はずれの蝶、ガラスを気にして、びら、びら、びらり」

「これだけ、もうこれだけ。いつもよりお安くなっています。お子さまにどうぞ」

「さあて、みなさん、仲よくいただきますよ。みんなハイですか。ハイ」。

「ちびっこ」どころか。多様で、おとなびていますね。

(名古屋大学)